

H27地域協働研究（地域提案型・前期）

RN-17「持続的な地域づくりにおける「地域資源」の活用と住民の地域意識の形成過程」

課題提案者：水分まちづくりの会

研究代表者：総合政策学部 山田佳奈

研究チーム員：平塚明（総合政策学部）

<要 旨>

本研究では、岩手県紫波町水分地区で構想された「一日博物館」のプロセスを長期的な視野で跡付けることにより、一連の活動を通じた主体的・持続的な地域づくりの諸条件を探求することをねらいとした。この活動では、地域住民から募った「お宝」がガイドブックやマップに掲載され、また「みずわけ湧くわく博物館」として平成28年6月に開催された一日博物館では公開可能なお宝が展示された。こうした活動を通して、「地域」（ローカル）と「個人」・「自分の家」（パーソナル）の「記憶」が再認識・再構成され、かつ次世代に継承される機会が醸成されつつあると考えられる。

1 研究の概要（背景・目的等）

岩手県紫波町においては、平成18年度より、身近な地域課題の解決に向けて住民自ら計画を策定するまちづくりが「地区創造会議」という形で進められてきた（聞き取りおよび紫波町HPより）。この取り組みは町内の地区単位で順次進められてきたが、今回の申請地域である水分地区においては平成23年から地区としての活動が始まり、翌24年に「水分まちづくりの会」が発足した。

紫波町の上記事業が終了した後も同会は活動を継続し、特に夏祭りの復活や地域の「お宝」の発掘、昭和20年代の新聞記事を復刻した冊子『水分物語』の発刊、地域の郷土食をまとめた冊子『みずわけおうち郷土料理』発行など、種々の実績を重ねてきた。

また、より恒常的な地区の交流の機会を目指し、同会は地域全体を「博物館」とする構想を立案した。この構想では、地域の歴史や伝統文化、潜在する「宝」を住民自身の手で掘り起こしながら次世代に継承し、またその活動の過程で地域の繋がりを深めていくことが目指された。

「水分博物館設立実行委員会」も組織され、観光・食文化・歴史・イベント・自然という5テーマのチームが活動を進め、同時に、本研究の申請時には既に「お宝」の募集がスタートしていたという経緯がある。

このように、水分地区においては住民自らの手によって活動が進められていたが、研究機関としての県立大学との共同研究を行う中で、長期的な視野のもと、一連の活動を通じた主体的・持続的な地域づくりの諸条件を探求することをねらいとした。特に地域の活動プロセスを跡付けることにより、地域の自己認識をより深め、住民による自主的な活動が長期にわたって自己展開していくための諸条件の示唆を得ることが期待される。

2 研究の内容（方法・経過等）

【方法】今年度は特に同地区の環境・景観および食文化を中心とする生活史に関する基礎調査を行いつつ、会の活動過程と住民の地域意識の把握を行うことを中心的な

内容とした。そのため、印刷物を含む博物館準備の協議・検討の会合等への参加（参与観察）と同時に、博物館運営に関わる先行事例および水分地区の歴史・自然・食文化に関する基礎的な文献調査や聞き取りを並行して行った。また、博物館当日は本学の学生とともに研究メンバー2名が運営の一部に参加した。



【写真1上】お宝ガイドブックとお宝マップ

【写真2右】お宝マップの掲示（博物館当日）



【経過】地区住民への呼びかけにより集まった約120点の「お宝」は「お宝ガイドブック」にすべて掲載され（コラムを本学研究メンバー2名が担当）、また「お宝マップ」の作製をイラストレーターの方に依頼して作成し、この両方を水分地区の全戸および来場者や協力者・機関等に配布した。

こうした準備を重ね、「みずわけ湧くわく博物館」は平成28年6月19日に予定通り開催された。

メイン会場の水分公民館では、主に①「お宝」46点の展示、②田舎スイーツの体験・試食、③宮手鹿踊りの上演や水分小学校の鼓笛隊演奏、④水分の歴史に関する紙芝居や、会の「歴史チーム」による発表などが行われた。



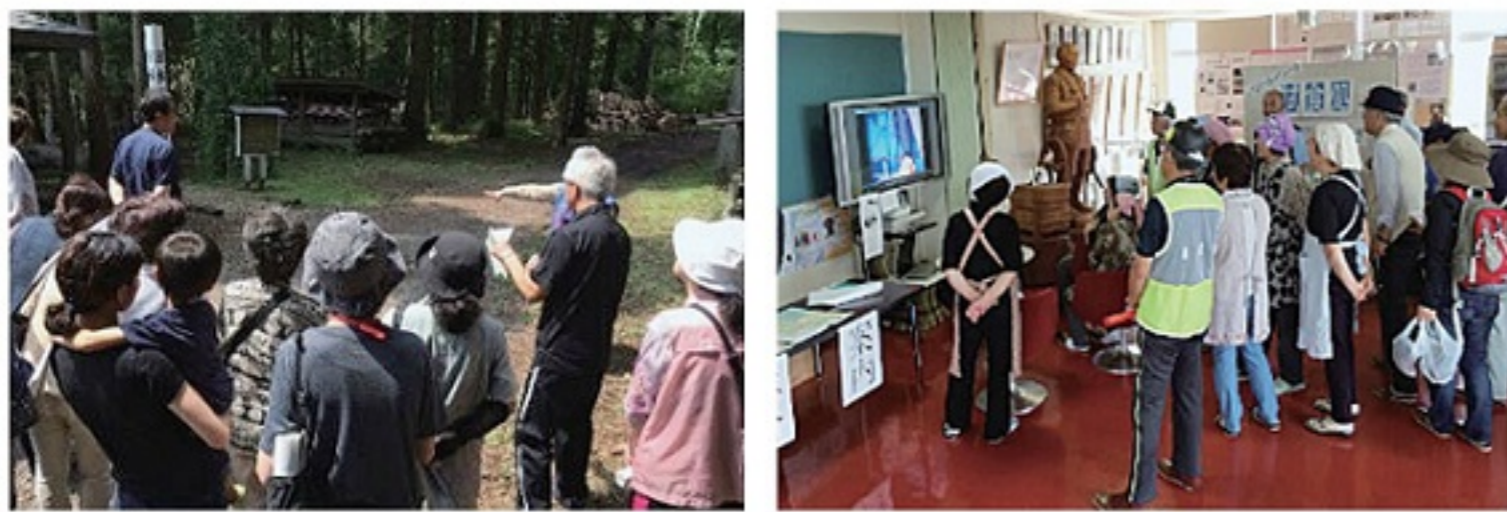
【写真3・4】お宝展示の様子（博物館当日のメイン会場）

また、サブ会場の武田家住宅（紫波町指定文化財：築およそ250年の曲家）においては、武田家および「武田家を守る会」メンバーを中心にしながら準備が進められ、貴重な水分地区内の古地図の展示や田舎スイーツ・日本庭園が体験できる空間となった。



【写真5(左)・6(右)：サブ会場「武田家」の当日の様子】
馬屋入口(写真5)とその内部のツアー時の様子(写真6)

同日行われたバスツアーは午前・午後とそれぞれ約2時間半ずつ実施され、幾つかのお宝の歴史ポイント（蜂神社・陣ヶ岡・武田家住宅・志和稲荷神社）をめぐり、紫波町の観光ボランティアと各ポイントでの説明者により解説が行われた。各回ともほぼ定員（25名）となり、アンケートでは「定員を増やしてほしい」という声も見られた。



【写真7】バスツアーの様子(当日) 【写真8】ビデオ上映(当日)

3 これまで得られた研究の成果

この博物館は一日の開館という形で計画されたが、「一回限り」のイベントということではなく、その後の継続的な実施が当初より想定されている。そのため、研究の成果としても長期的に捉えることが必要となることから、ここでは現時点で指摘できることとして数点に絞って述べたい。

その一つは、今回の博物館開催に向けた一連の過程を通して、「地域」（ローカル）と「個人」ないし「自分の家」（パーソナル）の両方の「記憶」が再認識され、かつ再構成される場が醸成されつつあると考えられる点である。これは、この「博物館」の特徴の一つと言えよう。

例えば、サブ会場の武田家住宅で展示された古地図では近世における水分地区の様子を見ることができ、敷地の境界線や屋号が鮮明に残されている。この展示会場では、地区の住民が「今の自分の家はどの辺りか」と探す様子も見られた。類似の状況はメイン会場でのビデオ上映においても見られ、地区の昔の祭りの映像は、地区の人々にとっては、時に地域や自分の家族・親族の記憶を呼び起こし、その場に集まった人々と共振するものともなる。さらに、その映像を通して世代を超えた会話が

生まれ、「地区の記憶」が受け継がれていくことは、この博物館が最終的に目指していた「次世代への継承」というねらいに添うものといえる。

また、それぞれの「お宝」がその奥にもつ具体的な個々の「物語」は、個々の住民が何をお宝と考えるかという「主観的意味」と密接に結び付く。住民自身のお宝の選択という過程こそが、この博物館の持つ個性の一つとなろう。

他方、「地区外」からの参加者にとっては別の視点が想定される。すなわち、「博物館」への訪問者として「お宝」を見学する一方で、「では自分の地域や家ではどうか」という自分の地域への振り返りが促される契機となりうる。参加者の声よりうかがえた。この点もまた、地域内外の複層的な視点が交差する、この博物館の特徴を示すであろう。

ここで、現時点でもう1点指摘しておくならば、博物館の運営に関する点となろう。先述の通り、「水分まちづくりの会」ではこれまで種々の行事や活動を行ってきたが、各家から集められたお宝の整理や管理は初めての試みであった。しかし、それらの取り組みと同時にツアーや試食など多様なイベントも行うという複雑な運営が可能になったのは、それまでの活動の積み重ねによる会の機動力と地域の「信頼関係」による結果ではないだろうか。この点も、持続的な地域づくりのポイントの一つと考えられる。

4 今後の具体的な展開

今後の具体的な展開については、今回の総括をしながら検討する必要があるが、全国でも地域ミュージアムの活動が進められていることから（塚原2016）、進行中の他事例を参照しながら考察と分析を進めることとなろう。

また、今回出品されたお宝を手掛かりとしながらさらに調査を深化させることも方向性の一つであろう。その際には、地区住民自らが地域を探求する機会としての深化と同時に、各領域の専門家が随時加わりながら、複合的な視点で探求が進める方法も考えられる。この点は本研究のねらいの一つでもあるが、それぞれの立場から地域の掘り起こしを行うなかで、内外の相互作用が地域に対する認識の深化および再構成とともに、地域への愛着形成の促進に寄与することが期待されよう。

5 その他（参考文献・謝辞等）

【参考文献】

塚原正彦、2016、『みんなのミュージアム 博物館・図書館未来学』、日本地域社会研究所
羽咋市チャンピオン協会、1986、『羽咋ギネスブック』Vol.1

【謝辞】

本協働研究を進めるにあたり、水分地区の皆様や聞き取り・アンケートにご協力いただいた皆様、資料収集にあたりご協力いただいた羽咋市立図書館の皆様に感謝申し上げます。また、平塚ゼミと山田ゼミの学生の皆さんにはディスカッションで興味深い示唆をいただきました。ありがとうございました。